# コロナ第3波 劇場にも影響広がる

第3波と呼ばれる新型コロナウイルスの影響が、劇場にも表れている。出演者の感染で公演を中止したり、高齢客への配慮に気をもんだり。演劇関係者の対応を尋ねた。

## 出演者が感染 中止や延期相次ぐ

歌舞伎公演では、東京・国立劇場11月公演の第2部「毛谷村」に出演していた片岡孝太郎が22日にPCR検査で陽性と確認され、千秋楽の25日まで公演を中止した。8月に東京・歌舞伎座で興行が再開されて以来、歌舞伎界では初の出演者感染による中止となった。

その後、共演していた父の仁左衛門と、21日に面会していた坂東玉三郎が濃厚接触者と認定されたため、12月の京都・南座「吉例顔見世興行」の第2部「熊谷陣屋」の仁左衛門と孝太郎、歌舞伎座「十二月大歌舞伎」の第4部「日本振袖始」の玉三郎に開幕冒頭、それぞれ代役を立てた。仁左衛門と玉三郎は検査で陰性が確認されており、大事をとった形。順次復帰する予定だ。

松竹は史上初の4部制で歌舞伎座公演を再開し、①各部とも幕間のない1時間ほどの演目②各部ごとに出演者・スタッフを総入れ替えし、客席や楽屋を消毒③収容率50％以下の観客数、といった厳しい感染防止対策をとって年内の興行を続けている。仮に出演者に感染者が出た場合も、「観客や他部の出演者・スタッフには波及しない態勢をとっている」という。

1日開幕した歌舞伎座「十二月大歌舞伎」で代役を務める尾上菊之助（右）と坂東彦三郎©松竹

横浜市の神奈川芸術劇場は、11月21～29日に予定していたダンス公演「Knife」を、12月3～6日に変更した。

PCR検査で16日、出演者8人のうち男性1人に陽性が確認された。男性は無症状で、稽古では全員マスクを着けており、共演者は濃厚接触者とされなかった。

男性は主要な役のため、主催する劇場は直ちに中止と発表した。だが、ベトナムや台湾のダンサーも来日しており、振り替え公演を検討。小さい会場で公演数が減って客席数は3分の2になったものの、直近の日程が確保できたので「初日延期」に変更した。稽古は20日から再開し、男性もオンラインでの参加を経て復帰した。

堀内真人事業部長は「二次感染が起きなかったのが大きい。あらためて緊張感を持ってリスクを減らすよう取り組んでいる」と話す。

## 収容率50％以下・座席に光触媒塗布 細心注意

スプレーガンで客席にコーティング剤を塗布する＝11月25日、東京・帝国劇場

劇団四季は、スタッフ・キャストらに発熱などの体調不良や感染者との濃厚接触の可能性がみられるなどした公演を中止した。新作オリジナルミュージカル「ロボット・イン・ザ・ガーデン」の東京公演（自由劇場）でも、開幕間もない10月と閉幕直前の11月の2度にわたり上演をとりやめた。

東宝は先月16日、東京・シアタークリエで上演中だったミュージカル「RENT」の関係者1人に陽性が確認されたとして、夜公演を中止。24日までにスタッフ・キャスト計21人に感染が広がり、12月6日まで予定していた全公演と続く愛知公演の中止を決めた。

劇場側も対策を講じている。東宝は11月下旬、抗菌や汚れ防止に使われ、新型コロナウイルスへの効果も期待される「光触媒」を利用した、酸化チタンと酸化銅を主原料とするコーティング剤を新たに導入し、東京・帝国劇場内の座席に塗布した。「安心安全に来ていただくための策」のひとつだ。

9月に政府が劇場の収容率100％を認めて以降、ミュージカルや商業演劇では最前列を除いて販売し、ほぼ満席となる劇場が増えた。全国公立文化施設協会によると、出演者と観客、または観客間での感染拡大は、7月の東京・新宿シアターモリエール以降、報告されていない。岸正人事務局次長は「感染が危ないのはマスクをしないことがある出演者の方。観客はマスクをし、しゃべらなければ、客同士で広がるリスクは少ないと思う」と話す。

（藤谷浩二、井上秀樹、伊藤綾）